福島県立図書館
東日本大震災福島県復興ライブラリー

ブックガイド

No. 13　　2015. 3. 1

■福島第一原発事故

『知ろうとすること』（新潮文庫）

早野龍五,糸井重里／著　新潮社　2014.10　LS543.4/H35/1

福島第一原子力発電所事故の発生後、日本人が「放射線」との向き合い方を問われる中、一部の科学者が冷静な姿勢で原発事故後の放射線の分析を始めました。その活動は、ベビースキャン、陰膳調査から、福島の高校生のスイスの研究所での発表にもつながります。
未経験の出来事を「理解し」、自らがどう対処するのかを「考える」ための姿勢を考えさせられた1冊です。対談形式でまとめられた文章、厚みのない文庫本という体裁、表紙の写真にも、この本で多くの人に伝えたい思いを感じます。

■文学　体験記

『鳥栖のつむぎ　もうひとつの震災ユートピア』

関礼子・廣本由香／編　新泉社　2014.12　LS369.31/S42/1

原発事故により、佐賀県鳥栖市に避難した母親たちが、人とつながり、支えられ、助け合い、紡いでいった、6家族の記録。避難する、しないの決断、避難を続ける、終了する、の選択、異なる決断と選択の中で、揺れ動く心情と、自分らしさを大切にしたい気持ち、それぞれの選択を尊重することの大切さが伝わります。 また、子を想い避難する中での迷い、揺れなどの心情、経験を記録として残すことの重要性も感じさせられます。

『福島に生きる』（双葉新書）

玄侑宗久／著　双葉社　2011.12　LS916/G1/1

福島に生き、福島を見据えて著者が問うこれからのあり方。3.11のあの時起きたこと、東日本大震災復興構想会議委員を務めながら「復興」と「再生」を見つめ、東京との温度差を書き綴っています。これからは、いいものを造って長く大切に使う「知足の社会」へ、権威にすがらず権力に頼らず、「フクシマ」は自分の足で歩きはじめるしかないと力強く語っています。

■各組織の震災対応

『紙つなげ！　彼が本の紙を造っている！』

佐々涼子／著　早川書房　2014.6　585.067/ｻﾘ146

今や当たり前のように私達の暮らしの中にある本や雑誌ですが、実は震災直後、出版用紙の供給は危機的状況にありました。世界最大級のマシンを擁し、日本の出版界を陰で支えていた日本製紙石巻工場が、津波により壊滅状態に陥ってしまったからです。
その石巻工場復活までの苦闘を綴ったこの本は、津波の犠牲者との対面、被災地の治安悪化など凄まじい当時の状況にも触れながら、あらためて、「紙」に込められた技術者の思いを伝える骨太のノンフィクションです。

■復興　防災

『被災地デイズ』（時代 QUEST）

矢守 克也／編著　　弘文堂　　2014.7　　369.3/ﾔｶ147/

大災害が起こった時、私達は様々なジレンマに直面します。本書では、被災者、救急隊員、自治体職員、報道関係者、ボランティア志願者などの立場で、こんなときあなたならどうする？という 31 の問いかけが提示されます。それぞれの「Answer」には、考えるためのヒントや材料は示されますが、「正答」は書いてありません。自分以外の立場に立ってみて、経験したことのないことを、ひとつひとつ具体的に考えてみること。その想像力は、これからの暮らしや防災、復興のために、大切な力になるのではないでしょうか。

■こども向け

『思い出をレスキューせよ！ ”記憶をつなぐ”被災地の紙本・書籍保存修復士』

堀米薫／著　　くもん出版　　2014.2　　369/ﾎ

岩手県大船渡市で、東日本大震災により被災した写真や賞状を洗浄・復元して持ち主の手元に戻す活動の中心となった金野聡子さんを描くノンフィクション作品です。

金野さんは古書を修復する専門技術をイギリスで学び「紙本・書籍保存修復士」となり、故郷の大船渡に戻ってきました。そこで震災に遭い、「がれき」となってしまった「生活の記憶」を未来へつなげる必要性を痛感しました。金野さんの熱意に動かされた多くの人々の活動により修復された写真は、人々の生きた証として蘇り、これからを生きる人々の心の支えとなっています。

『被災犬「じゃがいも」の挑戦　めざせ！災害救助犬』

山口常夫／文　　岩崎書店　　2014.12　　LS369.3/Y6/1

3.11 を境に、大切な家族や故郷と引き離された犬達がいます。震災直後の飯舘村で生まれ、岐阜の NPO へと引き取られた「じゃがいも」もその内の一匹です。じゃがいもは、今、被災した人々を助ける災害救助犬を目指し、厳しい訓練に挑んでいます。何度試験に落ちても、少しずつ前進していくじゃがいもの姿に、励まされる一冊です。

■その他のジャンル

『大災害時に物流を守る　燃料多様化による対応を』

早稲田大学マーケティング・コミュニケーション研究所／編　　早稲田大学出版部
2014.4　　675.4/ﾜｾ144

東日本大震災後、関東や東北各地で深刻なガソリン不足が続き、福島市内でも連日ガソリンスタンドに長蛇の自動車の列ができていたのを皆さんは覚えていますか？あのような状況の中で、佐川急便や仙台市中央卸売市場・日立市役所で多く導入していた「天然ガス自動車」が活躍したといいます。水素自動車の実用化も進んでいますが、災害時の物流においても、エネルギーの多様化を考慮するなどして、様々なシステムの単一化や集中を避けるべきであると改めて考えさせられる内容の本です。